

(八) 山中校長から遠藤校長へ

昭和四十八年七月三日、山中順三校長が病氣のために退職し、教務主任の遠藤貫中が新校長に就任した。

四日後の七月七日、講堂で両校長の離・就任式が行なわれた。式は三田理事長のあいさつに始まり山中前校長の告別の辞、生徒代表三浦由太の謝辞、遠藤新校長の就任の辞と続き、最後に生徒代表の川原康範が誓詞を朗読した。この中で山中前校長は、「建学の精神を体し、創立の趣旨が随所に実を結ぶように努力していただきたい」と望み、

遠藤新校長はこれを受けて、「学力・徳力・体力を身につけるよう、石桜精神をもって努力を重ねてほしい」と説いた。

山中順三は昭和八年岩手中学校に赴任し、二十九年十月に第四代校長に就任した。そして四十八年七月の勇退まで、実に四十年にわたって本校の歴史とともに歩んだ。とくに学校長としての二十一年間は、質実剛健を旨とした楽しい学校づくりに励み、教職員や生徒に大きな感化を与えた。

一方、第五代の遠藤貫中現校長は、旧制岩手中学校の第一回卒業生である。東京商大を卒業してから昭和二十四年母校の教壇に立ち、はじめ社会科を、そしてのちには英語を担当した。生徒から

みれば大先輩にあたるわけである。本校創立以来約半世紀が経過し、ともすれば建学の趣旨に対する理解も薄れがちな時期に、創立期の石桜精神を身をもって体験した先輩を学校長に迎えた意義はまことに大きいといわなければならない。

遠藤校長が就任したのち、三田理事長の決断にもとづいて、昭和四十九年度から岩手中学校の生徒募集が再開されたことは、すでに述べたとおりである。この喜びを、遠藤校長は「石桜」誌第七十号の巻頭言で、つぎのように表現している。

昭和四十九年度は、未来に大きな可能性をもつ、若い岩手中学校の生徒を迎え、ほんとうに



三田理事長、山中前校長、遠藤新校長を囲んでの離就任式当日記念写真

喜ばしい。

元氣にとびまわっている生徒を見ると、春に大地から出てくる若芽を連想する。

池大雅は若木の下で笠をぬげと言った。

今は若木であるけれども、無限の可能性をうちにひそめている若者に、敬意をもって接せよと言う意味である。

わたし達はこの可能性を現実のものたらしめるため、きびしさとともに愛情をもって教育しなければならぬ。

昭和五十年三月一日

学校長 遠藤貫中

この文に接するとき、われわれはただちに鈴木卓苗初代校長を連想する。鈴木校長の学園主義というのは、学校を植物園に、また生徒を植物の若芽にたとえ、それをのびのびと育て上げるのが、園丁である教職員の使命であるとする考え方であった。その薫陶を受けた遠藤現校長が、恩師とひじょうによく似通った教育理念を持つにいたった事實は興味深い。あるいはこのあたりに、私学の伝統がいつまでも受け継がれて滅びない秘密があるのかも知れない。ともあれ、近代経済学を修めた学究肌の現校長が、今後母校をどのように発展させて行くか、関係者の寄せる期待は大きい。

(九) 母校の現状——A君への手紙から

岩手中・高等学校の周辺は以前田圃だらけで、人家もまばらだった。せまい道路が、梨木町から

長町へと伸びていた。寒い日など、汽車からおりた少年たちが、霜を踏みしめ、白い息を吐きながら、遅刻したくない一心で永祥院墓地の小道を学校へと急いだものである。永祥院墓地には、心をときめかせる何物かがあった。霊園としての閑静なたたずまい、樹木や草花に見える四季おりおりのうつりかわり、そして鳥や虫たち。

その永祥院はいま、へいで取り囲まれてしまった。学校の西側には都市計画による広い舗装道路が通り、バス停までできている。家屋も目立って多くなり、隣接地に河北小学校が建った。そんな都会の雑踏を縫って、晩秋土曜日の午後、岩手高校への道をたどる。

正門を通って一步構内に足を踏み入れると、急に時代をさかのぼったような錯覚におちいる。そこには四十年前の木造校舎が、昔ながらの姿を残しているのであった。米内海軍大将の揮毫になる「鴻恩無窮」の台臨記念碑もそのままである。戦後造られた石桜図書館は、蔵書数三万五千冊を誇る県下有数の施設であるが、その建物でさえ、歳月の重みを体現している。まして戦前の校舎は、圧倒的な貫禄を持って当然であろう。

玄関に入ったすぐ左側に、受付の小さな窓がある。そのスタッフは五人で、なつかしいラッパさんの息子さん顔も見える。「一カ月分たまっていないぞ」「はい、すみません」。月末ともなれば月謝納入の列ができる。職員室には行かずに済んでも、この事務室にだけは、月に一回立ち寄りなければならぬ。

事務室の隣は校長室である。壁にかかげられた

初代理事長と歴代学校長の大きな写真、そして野球部甲子園出場の思い出につながる「花と少女」の絵。この部屋で説論された経験を持つ卒業生の数は、結構多いはずである。その奥に、重いとびらをへだてて、職員室が二部屋続く。ときどき同窓生が姿を見せると、あちこちから「オッ」「元氣か」と声がかかる。そして、卒業後のこと、近況、同期生の消息など、しばし話に花が咲く。先生の転勤が多い公立高校では、ちよつとみられない光景である。本校の師弟のきずなは固い。

廊下に出ると、階段のところは野球部の部屋がある。渡り廊下の向こうは、一番南が音楽室。薄暗い寒々とした部屋であるが、それでも情操教育の殿堂としての輝かしい歴史を持つている。そして床の大病痛んできた体育館があり、その北に、剣道部室を間にはさんで柔道場が並ぶ。

後校舎の一階に入る前に、校庭に目を移してみよう。各運動部が入りまじって練習しているありさまに接すると、もう少し広げればどんなにいいだろうと思う。それにしても、生徒たちの動きはきびきびしている。

さて、後校舎西端の階段下は、アイスホッケー部の部屋である。昭和三十五年三月にもらった石桜団体功労章第二号の表彰状が、額に納めてかざつてあるところなど、いかにもほほえましい。すぐ近くの一Dと一Eの教室をのぞこうとしたり、いきなり中からプラスチックの勇壮なマーチが響き渡ってきた。数々の賞をもらっているだけあつて、技量は確かなものである。放課後、ここに集まって練習を重ねているらしい。その隣は中三甲

の教室。少数精鋭主義の中学校教育なので、クラス分十数個しか机がない。

続く後校舎の一階東側は、物理室・地学室・化学実験室・階段教室で、科学する心を身につけるための大切な部屋部屋である。どことなく大学の教室を思わせる、アカデミックな雰囲気を持った一角になっている。あるいは、いまの生徒たちも昔のように、階段教室の高いほうの席から、下をめぐめてチヨークの弾丸を発射したりするのだろうか。そして階段教室前の階段下は、陸上競技部の部屋である。

ふたたび渡り廊下の向こう側、便所と講堂にはさまれた場所に、一棟の小屋がある。四つに仕切つて、庭球部・ラグビー部・ハンドボール部・バスケットボール部が、仲良く同居している。そのさらに向こうに、日本水泳連盟から甲種競泳池として公認された岩手高等学校プールがある。ここから、無数の名選手が生まれた。

校舎にもどつて近くの階段をのぼれば、後校舎の二階に高二と高一の教室が並ぶ。どこをのぞいてみても、長い伝統を感じさせる。それでいて不思議なことに、生徒の手による破壊のあとがほとんどない。職員と生徒の間に、古い校舎をいたわる気持が、よほど徹底して行きわたっているに違いない。師弟の愛校心と、質実剛健を尊ぶ気風とが、痛いほど伝わってくる。

二階の西端の絵画室をのぞき込んでから再度後校舎中央部にもどり、前校舎へ通じる廊下をたどつた。その途中の左手の一室は、いま第二会議室と呼ばれている。しかしこの部屋こそ、秩父宮台

臨の記念として、大沢川原の旧校舎から移築した特別室にほかならない。往時は床に、リノリウムが張つてあつた。だから水でぞうきんがけなど論外で、ていねいに油をぬって手入れした。そして及落判定会議などのような重要会議のときだけに使われたものである。戦後の生徒急増期には、一時教室に転用されたこともある。だが、いまなおこの部屋は、厳肅な風格を失っていない。

前校舎の二階は高二と高三の教室であるが、その間に小部屋が二つはさまつていて、一方は出版室兼山岳部部室、もう一方は社会科学教材室になっている。後者は、石桜図書館ができるまで図書室だったところで、戦時中は本校関係の英書をまつる忠霊室に当てられたこともある。

ところで廊下の窓から中庭を見おろすと、いまどきめずらしいマキの山が目に入る。セントラルヒーティング時代に、各教室とも昔ながらのマキストーブを使つていたのである。ローブで一定の大きさの輪が作つてあつて、それ一束分のマキが一日の使用量ということになっているが、ときどき違反クラスが出るらしい。エア・コンや石油ストーブなどでは味わえないマキストーブの人間的な暖かさを、生徒たちはよほど気に入つていてとみえる。休憩時間に友情の輪ができて、よもやま話に声はずむのは、昔もいまも変わらないであらう。

一階におりて、講堂に足を運ぶ。ひところは、東北一といわれた施設である。西端の体育館と違つて、床はまだしっかりしている。何度か手を加えたのだろうか。片隅にバスケットのゴールが置

いてある。だが、体育館として設計されたものではないので、運動部の練習には向かないかも知れない。天井のところどころに、雨もりのあとがあった。

前校舎一階に入ると、階段下の卓球部室の向かいが文書庫、さらに二甲教室・救護室・一甲教室と小部屋が続く。以前は普通の大きさの教室だったが、中学校は人数が少ないので、一部屋を二つに仕切って使っているためである。そして、生物標本室と第一会議室の前を通れば、ふりだしの玄関にもどる。

ついでだから、掲示板をちよつと眺めることにしよう。いろいろなビラがにぎやかに張りつけてあって、学園の活力を感じさせる。それも当然であろう。ここには三十三名の職員と、六百七十余名の生徒がいて、日々研鑽を積み、人間形成に励んでいるのである。土曜の午後なので人影は少ないが、それでも校庭では運動部員がかけ回り、後校舎からは歯切れのよいプラスバンドの雄たけびが聞えてくる。

おや、上のほうに墨書の張紙があった。年月日・学年・組・氏名に続いて、つぎの文字が読める。「右は校外において生徒の本分に反したる行為ありたるにより学則第三三条の規定により三日間の停学に処す」。賞せられる者もあれば、罰せられる者もあり、これも学園が生きて活動している証拠である。

ともあれ、面目を一新した京都の中央部に、いまなお四十年前の面影をそのまま残した世界があるというの、ひとつの奇跡的な現象といつてい

えないこともない。この世界だけが、時の流れから切り離されてしまったのだろうか。いや、そうではない。時は確かに流れ、代々の若者たちが、ここで青春の情熱を燃焼させてきたのである。その営みは、絶えることなく永遠に続く。なぜならば、ここにはあらゆる苦難を乗り越えて進む石桜精神の伝統があるからだ。そんな思いを抱いて、愛する学園をあとにしたのであった。

(十) 創立五十周年を迎えて

同窓会記念事業・記念行事 石桜同窓会の誕生は、三回卒業生直前の昭和八年二月である。その後初代会長工藤久吉、第二代会長松浦文弥のもとで、組織が育つて行った。

しかし、同窓会の存在が大きくクローズ・アツプされるようになったのは、戦後卒業生の累計が何千という規模に達してからで、とくに野球部の甲子園出場を全面的に後援したところからは、活動に熱が入ってきた。

昭和三十四年八月、第三代会長に就任した松見得明現会長は、学校とのパイプ役を果たした戸嶋正夫副会長、精力的に動き回った栃内松四郎副会長に助けられ、同窓会の充実にめざましい実効をもたらした。松見会長は、まず機関紙の発行を企画した。これが三十六年八月の総会で承認され、三十七年六月、タブロイド版二ページの「石桜同窓会報」創刊号ができあがった。以後五十一年一月までに十回発行されているが、この会報が同窓会員の結束を固める上でどれだけ役に立ったか、

はかり知れないものがある。

二人の副会長のうち、戸嶋正夫がしりぞいて熊谷龍男が後任になった四十九年九月の総会は、同時に五十周年をめざして一億円の募金運動を展開することを決定した重要な会合であった。これは五千有余を数えるにいたった同窓生が浄財を出し合い、校舎改築資金の一助にするというものである。さらに五十年十一月の総会は、翌年にせまった創立五十周年の記念事業の大綱を決めた。

そしてついに、岩手中・高等学校は、創立五十周年の記念すべき年を迎えた。同窓会は計画どおり記念誌の刊行準備にとりかかるとともに、記念同窓会などの手はずを整えた。昭和五十一年十月二十二日付の岩手日報朝刊は、見開き二ページをさいて石桜同窓会の広告を掲載した。その中に、松見会長はつぎの一文を寄せている。

母校創立五十周年に寄せて

石桜同窓会長 松見 得明

私学というものは国公立学校と異なり、独自の設立理念をもつものである。

わが母校岩手中学校は、先代三田義正翁が、第一次世界大戦後、ようやくきざした軽佻(けいちよう)浮薄、奢侈淫楽(しゃしいんらく)の思潮を憂え、次代を担うべき青少年の健全育成、国家有為の人材輩出を企図し「積慶」「重暉」「養正」の三大校をを設定して創設されたものである。

以来満五十年、五千有余の同窓はその理念の



卒業生 在校生一堂に会しての記念講演聴講

もとに学び、石割り桜に象徴される、いわゆる「石桜精神」をもって各界に活躍していることは同慶にたえない。しかし時の経過はわずかに五十年。第一回生が六十代に至ったにすぎず、建学の精神の顕現も緒についたばかりと言つて過言ではない。この度、創立五十周年を記念して、同窓相寄り諸行事を催し、祝賀するゆえんのもの、社会にその実績の一端を披瀝するとともに、五十年の足跡を顧み、建学の原点に立ち返つて、後半世紀への、新しい一步をふみ出そうとするものにほかならない。

諸賢もしその意図するところを是とし、ご支援助賜るならば、まことに幸せであり、心から謝



同窓会祝賀会で母校50周年を祝して乾杯

するところである。

翌十月二十三日を期して、創立五十周年記念行事の講演会・美術展・同窓会総会・懇親会がいつせいに開かれた。南部会館を会場とする講演会では、宮城音弥が「期待する人間像」という演題のもとに講演し、聴衆に多大の感銘を与えた。また盛岡地区合同庁舎別館展示場で二十五日まで開催された美術展は、同窓生の近藤一彦（写真）、佐藤祐司（彫刻）、宇津宮功（絵画）の作品を展示し、美術愛好者の目を楽しました。

しかし、記念行事の圧巻は、やはり南部会館で開かれた同窓会総会とその後の懇親会であった。



反響を呼んだ記念美術展

愛校心に燃える多数の同窓会員が出席した総会の席上では、第十二回生の浅理克巳が緊急動議を提案したが、その内容は校舎と施設の改善を訴えるもので、その真情は、満場の共感を呼んだ。この一事を見ても、半世紀を経て、同窓生の情熱が一つの方向性を持ち得るようになったことが痛感される。石桜同窓会は単なる親睦団体の域を乗り越え、発言力のあるエネルギー集団に成長した。そして一億円募金運動も、目標額にこそまだ達していないが、五十一年十月二十五日現在の募金申込状況は千六百五十余万円であり、なお申込がつづいている。

学校記念行事 同窓会の記念行事が盛大に催

された旬日後の十一月三日、今度は学校としての創立五十周年記念式典が挙行された。式はごく内輪だけで行なうという基本方針であった。当日、岩手奨学会・同窓会・PTAの関係者約二十人が来賓として出席し、午前十時から式が始まった。

三田義一理事長は、夫人を伴って臨席し、壇上から生徒たちに対して、健康の大切さ、信頼関係の尊さを元気に語りかけた。続いて遠藤貫中校長があいさつに立ち、本校五十年の校史にふれ、若者の英知と勇気への期待を述べた。さらに、本校に二十年以上勤めた永年勤続者十一人の表彰が行なわれた。最後に生徒代表の照井康之が、母校の榮譽と伝統に恥じないよう、いっそう心身の練磨に努めることを誓った。

式典そのものは簡素であったが、その意義は大きかった。とりわけ、永年勤続者の表彰は感激的であった。生徒たちは、多くの職員が自分の生まれる前からこの学校にいたのだと知って、驚きとともに感謝の念を深めた。事実、二十年以上の永年勤続者が十一人もいるというのは、本校の半世紀にわたる歴史の厚みを如実に物語る具体例にほかならない。なお、記念品として、金田一京助監修の国語辞典と、校章をかたどった紅白のらくがきが、全員に配られた。

後日、高二のあるクラスで、生徒に作文を書かせた。「五十周年式典を迎えて」「学内点描」のいずれかをテーマにして、自分の思ったとおりのことを書くように指示したところ、前者を選んだ生徒が圧倒的に多かった。しかしその内容につい

ていえば、五十周年といっても実感がわかないという感想を持った生徒が意外に多数を占めていることに驚かされる。もともと平均的だと思われるのは、つぎのような意見である。

岩手高校が創立されてから五十年たったといってもピンとこない。理由は簡単である。学校の歩んできた歴史を知らないためである。母校の五十年の歴史をよく知り、理解して、岩手高校生としての誇りを持ちたい。

確かに学校要覧や生徒手帳には、本校の沿革が簡単に項目書きにされているけれども、それだけから母校の輝かしい伝統をつかみ取るのはむずかしいであろう。いろいろな機会をとらえて、教職員や先輩が具体的に話して聞かせる必要がある。その意味からも、この記念誌がきっかけになって現代の生徒たちにいま以上の愛校心が育てば幸いである。

その他の意見としては、「校舎を新しくしてほしい」「木造にはそれ独特の味がある」といった施設についての声が多い。また同時に、自己を反省する気持も強く、「運動部の成績も大学への進学率も他校に負けたくない」「大学進学をあきらめないで、みんなでがんばりたい」「けんかの強い者がクラスの中で権力を握っているのは好ましくない」「授業中もつと静かに先生の話を聞くべきだ」「服装がはでな者、帽子をかぶらない者がいる」「先生と生徒、先輩と後輩のつながりを大切にしたい」「古い伝統を守って、よりよい学校

にして行きたい」などの意見がある。創立五十周年の意義深い年を迎えたいま、こういった自省の気持を生かし、師弟ともに石桜精神を発揮して、大いに母校をもり立てて行きたいものである。

(二) 学園の歴史と展望

本校の歴史は、いまや半世紀を越える重みを有するにいたった。質実剛健の気風を持った若者を育てようという三田義正翁の情熱が、大正十五年に岩手中学校を誕生させて以来、私学による人材育成をめざして、多くの先人が真剣な努力を重ねてきた。

まず初代の鈴木卓苗校長は、「草創期」に学園主義をかかげて、生徒の個性をのびのびと育て上げようとした。その自由主義的・個人主義的な人格教育は、現代の視点からみても高い価値を有するものである。しかし、それだけに満州時変後の時代的要請に合わない面があった。

第二代校長として迎えられた栃内曾次郎海軍大將は、学校経営の手腕を発揮するいとまもなく、就任式の席上で演説中に倒れ、数日後に不帰の客となった。ここに、校難に明け国難に暮れた十余年が始まる。その十余年は、わが国が戦乱の泥沼にはまり込んで行った不幸な時代ではあつたけれども、昭和十八年ごろまでは学園に青春の気がみなぎり、「発展期」の様相をはっきりと呈していた。たとえば昭和十年の秩父宮来臨、十三年の新校舎完成などに、当時の盛んな校勢をしのぶことができる。



壇上から温顔で語りかける三田理事長

この戦前の「発展期」から戦後の「新生期」にかけて、激動の時代によく対処したのが第三代の佐々木哲郎校長である。佐々木校長は二十一年あまりの在職期間を通じて、成績の悪い生徒はどしどし落第もさせる厳格さを守り通し、学力向上と規律ある学校づくりに腐心した。とくに、戦後の新しい教育制度のもとに岩手中学校と岩手高等学校を発足させ、いちはやく六年間の一貫教育体制を築き上げた功績は大きい。

第四代の山中順三校長は、学園の歴史をつらぬく石桜精神を、新時代にふさわしい形でよみがえらせようとした。ねばり強いファイトに裏打ちされたジェントルマンを養成しようというその方針

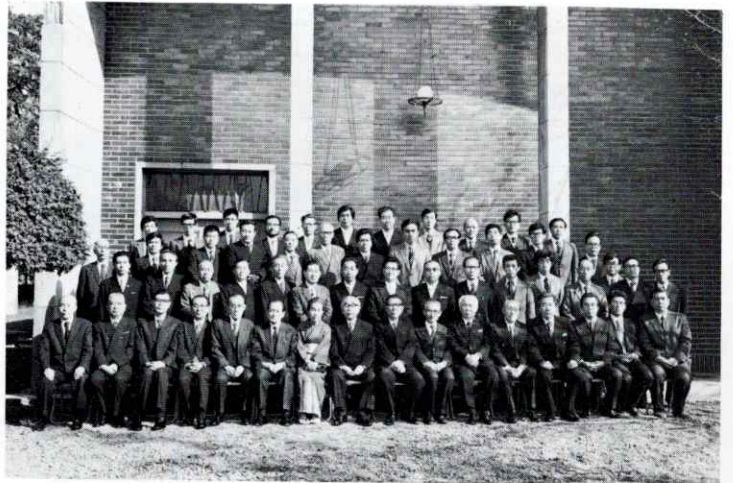


創立当時のことに耳を傾ける生徒たち

は、まず石桜会各部の充実となつて実を結んだ。文化部と体育部の多くが、昭和三十年代にめざましい活躍ぶりを示した。しかしこの「雄躍期」にも、深刻な難題が待ち構えていた。中学生の募集難である。

本校ではこの事態を打開するため、優秀な生徒だけに入学を許可し、徹底した英才教育をほどこす方針をとった。しかし、生徒数が絶対的に不足する傾向を食い止めることができず、ついに昭和四十六年度から三年間、岩手中学校の生徒募集を停止するにいたった。

中学校から高等学校にかけての六年間一貫教育を大きな特色としてきた私学の本校に、中学校が



50周年記念式典に参列した来賓、理事長、教職員

なくなるといふのは、見方によれば、学園の存亡にかかわる一大事である。この点を憂慮した三田義一現理事長は、万難を排して中学校の生徒募集を再開する決断を下した。ここに第五代の遠藤貫中校長のもとに、岩手中学校は昭和四十九年度からふたたび新入生を迎え入れるようになり、今日にいたっている。

私学の経営に苦難はつきものである。その苦難を乗り越えながら、本校が岩手の私立名門校としての地位を、半世紀にわたって確保してきた事実には、大いに誇るべきものである。その校史の裏には、歴代の理事長・学校長をはじめ、職員や生徒や父兄や同窓生など、学園関係者全員の汗と涙が

光っている。そしてわれわれは、この光輝ある歴史と伝統を、今後も永久に存続させたいと、心から願うものである。

私学に苦難はつきものであるが、だからこそ、公立校にない長所が芽生えるともいえる。苦難を克服した者のみが生き残れるという真剣さの中から、私学はそれぞれの特色を形成して行く。学校の歴史をふまえて未来を展望しようとするとき、中学と高校の一貫教育を徹底させる方向が望ましいことは明らかであろう。そこではぐくまれる師弟や朋友同士、また先輩後輩の緊密な人間関係こそは、たとえようなない財産である。中学・高校の上に、さらに大学を持つようになれば、この特色がいつそう強まるに違いない。

半世紀という期間は、私学教育のような巨大事業にとつて、まだ中途半端な長さだともいえる。その全期間を通じて、学園のエネルギーを最高水準に保つことは、実際問題として不可能である。中間には当然、いくつかの波がある。エネルギーが盛り上がった期間だけをとってみれば、五十年があるいは二十五年か三十年ぐらいの長さしか相当しないかも知れない。第一回生がまだ六十歳代であることを考えても、本校の歴史は浅いというべきであろう。さらに歳月を積み重ね、六十周年、七十周年の時点に達したとき、はじめて歴史的に正当な評価が可能になると思われる。

かつて一教諭が、「伝統は職員室が作るもの」と語ったことがある。教育の場で、直接に指導力を発揮するのが教職員である以上、この発言には否定しがたい真理が含まれている。と同時に、伝

統は理事者が、同窓生が、父兄が、在校生が作るものでもある。すべての学園関係者がこの使命を自覚し、私学の特色である人間的なつながりの強さを生かしながら、惜しみなく力を出し合つて協調の成果をあげることこそ、今後の進むべき道であろう。

技術だけが異常に進歩し、経済だけが急激に拡大する時代は終りを告げようとしている。人間がその尊厳をとり戻し、多様性を包含しながら人間性豊かな未来を切り開くべき時代が、もうすでに始まりつつある。この時代背景のもとで、鈴木卓苗初代校長のとなえた学園主義が、いま新たな光輝を発してはいないだろうか。

そしてわれわれが何よりも誇りに思うのは、やはり長い伝統のもとに培われてきた質実剛建の気風、「石桜精神」である。創設者三田義正翁の建学の精神は、半世紀を経てますます新鮮な香気を放っている。自分自身が、家庭が、企業が、社会が、わが国が何らかの苦境に立たされたとき、われわれの胸に、あの校歌がわき上がつてこないだろうか。

旭日におう桜花

其芽大地の深きより

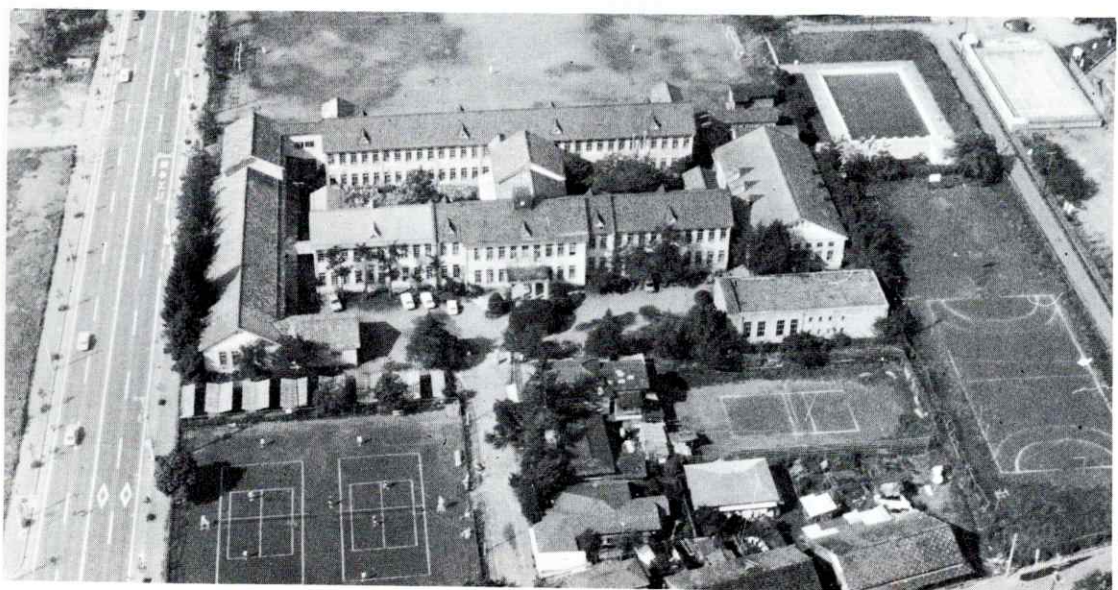
出でて貫く花崗石

郷の名所青春の

意気をかたどるうれしさよ

石桜は、若難にうちかつ若々しいエネルギーの象徴である。そしてうれしいことに、苦難は苦難

だけに終るのではない。それを乗り越えて、年々美しい花を咲かせるのが石桜である。



学園一望(昭和51年10月撮影)